

華嚴における「十義門」説について

——特に法蔵を中心として——

池 要

初めに、ここで問題とする「十義門」とは、華嚴数字で説く法界縁起の体事として十玄門の各々に具わるとされる教義等の十対二十句の十義を言う。この十義は、智儼（六〇二・六六八）の『搜玄記』に初出し、法蔵（六四三・七二二）へと承け継がれて行くのであるが、その間、幾度か名称及び順序等が変更され、法蔵によって体系化されることとなる。小論においては、法蔵を中心として十義門成立の経緯の一端を、宗趣の問題と合わせて考えて行きたい。

まず、法蔵の師智儼について、その概略を見て行きたい。智儼は『搜玄記』において、『華嚴經』の義理内容を十玄門をもって明かしているが、その十玄門の一々に教義・理事・解行・因果・人法・分齊境界・師弟法智・主伴依正・逆順体用自在・随生根欲示現の十義が具足することを説いている。（大正三五・一五b）そして「此等十門相応無有前後也」（同）と明かしている。この十義門の中、前五門は主として

理論的意味合いが強く、後五門は実践的内容を持ったものも用いられている。『搜玄記』では『華嚴經』の経意を明かすのに、十玄門よりも十義門を重視しており、更に十義門の中でも理論的意味合いの強い前五門を十門に聞いて説いている処に特色がある。智儼のこのような見解は、『孔目章』においても見受けられる。即ち、

初会十門料簡一部経意者。初会如是我聞首料簡下文所目之義。約有十門。謂人及法理事義文解行因果。（大正四五・五三六c）

とあるように、人法・理事・義文（教義）・解行・因果の五対十門をもって経意を捉えようとしている。

このような点を念頭において、次に智儼の宗趣説との関連を考えてみたい。師は『搜玄記』の中で、『華嚴經』の宗趣を総別二門に分かつて論じているが、この中、別門の宗趣として教義・境行・理事・因果の四対を上げている。（大正三五・一四c）この四対において、境行は解行の意に近く、他

三対は十義門にもその名称を見出すことができる。つまり、宗趣というものが一經典の思想的本質を明らかにするものであることから、智儼の宗趣としての四対が十義門の前五門に取り入れられ、さらにより実践的性格を帯びて十義門として語られているように考えられる。

なお、『一乗十玄門』については、古来様々な問題を有する書物なので、小論では割愛するが、少なくとも十義門の名称・内容に関しては『搜玄記』等と同義であるように思える。しかし、十義門自体の扱いがかなり異なるように思われ、『一乗十玄門』の説をもつて智儼の十義門説と考えるには、なお検討を要するのではないだろうか。

このような智儼の見解は、法蔵へ承け継がれて行く。法蔵は『五教章』『義理分齊』に、十玄縁起を立義門と解釈門の二門に分かつて論じているが、前者で十義門を後者で十玄門を説いている。(大正四五・五〇四c~五〇五a)そして十義門について、智儼と同様の解釈を示し、教義等の十義が「皆各総攝三切法。成無尽也」(同)と明かしている。また、『華嚴經文義綱目』にも、これと同じ見解が認められる。(大正三五・五〇一b)この両書に見られる十義門説は、『搜玄記』等と比べると、順序に変更はあっても、名称自体の変更は無きに等しい。また内容に関しては、『五教章』では説明が非常に簡素であり、『文義綱目』に至っては全く説明が為されて

おらず、おそらく智儼の解釈をそのまま承けていたものと考えられる。

法蔵の十義門が、智儼のそれは比べて大きく変容するのは、『華嚴經旨帰』においてである。即ち、『顯経義』第七に所標の法を明かすのに、教義・理事・境智・行位・因果・依正・体用・人法・逆順・応感の十対をもつてしており、その一々にも説明を加え、

然此十対同時相応。成一縁起無礙鎔融。随有一処具一切。是此經中所具之法。(大正四五・五九四a)

と結んでいる。これを『五教章』等の十義門と比較すると、解行を境智に改め、逆順体用自在を逆順と体用とに分ち、さらに体用に師弟法智を撰めている。また主伴依正を依正に、随生根欲示現を応感に改めるなど、名称・順序共に大幅に変更されており、より整備されたものとなっている。ここで説く十義門説は、そのまま『探玄記』へと承け継がれている。即ち、巻第一「義理分齊」において、十玄門のいずれにも教義等の十義が具足することを、蓮華の一葉の喩えをもつて示すなど、さらに具体化して説いている。(大正三五・一二三a~b)

このような十義門の整備は、十玄門が幾度が名称及びその意義を変更しているのと相応して為されており、法蔵が教学の体系化に如何に腐心していたか、その一端を示すものと言

えよう。しかし、このような法蔵の十義門説は、智儼の説に比べて確かに整備され体系付けられているが、その説く処は大義においてほとんど変化はなかったものと思われる。特に教義等の十義が、同時に相応して無尽の縁起を成ずと説く処などは、智儼以来、一貫して説かれてきたもので、法蔵もこの点を忠実に踏まえている。法蔵の教学は智儼教学の整備体系化にあったとはよく指摘されることであるが、ここにもその軌跡を認めることができる。

さて次に、法蔵の十義門説と宗趣説との関連について考えてみたい。『華嚴経』に関する法蔵の宗趣説は、『文義綱目』と『探玄記』に見られる。宗趣を総別二門に分けて説くのは智と同じ立場であるが、ここで問題となるのは、別門で明かす宗趣説についてである。即ち、『文義綱目』においては、別門の宗趣に五対十句ありとして、境行・理事・教義・因果・人法を上げている。（大正三五・四九五）これは智儼の説く四対に人法を加えたものである。しかし、その人法も『探玄記』においては宗趣説より削られている。『探玄記』では、別門の宗趣として教義・理事・境智・行位・因果の十事五対を上げている。（大正三五・一二〇）『文義綱目』での五対と比べると、人法・境行が削られ、新たに境智と行位が加えられていることが分る。十義門等の説明より考えると、これら二対は『探玄記』以来説かれている境行を二門に開いたもの

と思われる。そしてこの五対は同時に、『探玄記』『旨帰』で明かす十義門の前五門と全く同じである点に留意させられる。

これを、法蔵が整備体系化した十義門の、前五門をそのまま宗趣説として用いたと捉えるならば、法蔵は智儼の説を承けて、『華嚴経』に基づいた華嚴教学の理論的根拠を宗趣に求め、さらに後五門に実践的内容を持つ綱目を取り入れて、十義門説を組織して行ったのではないかと思われる。

智儼から法蔵へと承け継がれて行った十義門説は、前述したように名称・順序にこそ変更はあるが、その意図する処にはほとんど変化はなかったものと考えられる。要するに法蔵は智儼の基本的立場を忠実に踏まえた上で、十義門を総括したものであるとして宗趣を論じ、それを基調として重々無尽を説く十玄縁起説を組織して行ったのではないだろうか。

- 1 小林実玄『華嚴一乗十玄門講讀』一三二頁～一三九頁
- 2 智儼の宗趣説については木村清孝博士の『初期中国華嚴思想の研究』での詳細な研究がある。
- 3 石井公成『二乗十玄門』の諸問題（『仏教学第十二号』）
- 4 鎌田茂雄博士は『中国華嚴学よりみた法界義鏡の特質』（『東洋文化研究所紀要第五十二冊』）の中で、この問題を当時の中国仏教の現状より考察されている。
- 5 高峯了州『華嚴思想史』二二三頁～二二四頁

△キーワード▽ 華嚴、法蔵、十義門説、宗趣
（龍谷大学大学院）